2025年4月20日  川越教会  イースター

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

あなたに向かう「復活」

［マタイによる福音書28章1～10、16～20節］

さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリアともう一人のマリアが、墓を見に行った。すると、大きな地震が起こった。主の天使が天から降って近寄り、石をわきへ転がし、その上に座ったのである。その姿は稲妻のように輝き、衣は雪のように白かった。番兵たちは、恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった。天使は婦人たちに言った。「恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。さあ、遺体の置いてあった場所を見なさい。それから、急いで行って弟子たちにこう告げなさい。『あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる。』確かに、あなたがたに伝えました。」婦人たちは、恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。すると、イエスが行く手に立っていて、「おはよう」と言われたので、婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。イエスは言われた。「恐れることはない。行って、わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる。」

さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った。そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた。イエスは、近寄って来て言われた。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

[1] 「イースター」は、よくは分からないけれども…

　先週一週間は、主イエス様の十字架への歩みを覚える「受難週」でしたけれども、今日は主のよみがえりを記念する「イースター」の日曜日です。既にご一緒に主の復活を歌う讃美歌も歌いました。皆さん、イースターおめでとうございます！

　「イースター」と言うのは、言うまでもなく、主イエス・キリストの復活・およみがえりを讃える日ですよね。イエス様が十字架の死からよみがえられたということですから、聖書はそのことを何かすごく大きなスペクタクルとして描写しているかと言うと、決してそうではないようです。むしろ幼な子イエス様誕生のクリスマスの方が、描写としては派手と言うか、ひきつけるものを持っています。夜、天が輝いて天使たちの軍勢の讃美の声が湧き起こる事や、羊飼いたちの歓喜、また大きな星が東方からの博士たちを導いたりしています。それに比べるとイエス様の復活についてはどうでしょう？ある意味とても静かです。確かに大きな地震が起こったという描写はありましたが。そこで復活のイエス様が大見えを切って登場する訳ではありません。描かれているのは、空っぽになった墓の存在であり、天使の落ち着いた声です。「あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ」という説明だけです。今日の箇所の女性たちも、イエス様の弟子たちも、いきなり直接イエス様に会った訳ではないのですね。

「イエス様の復活」というのは、やはり「神秘」なのだと思います。自明のこと、分かり切ったことじゃないんだと思います。ですから「イエス様の復活など信じられない」と言う人が居てもおかしくはないです。今日の聖書の中にも描かれています。28:17に、復活されたイエス様と出会った弟子たちのことが書かれていますが、その中に「…イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた」と書かれてあるのです。「そんなこと書かなければいいのに」とちょっと思いましたけれども、私はそれこそが聖書のリアリティだと思います。あるがまま描いている。イエス様に会っているのに「疑う」ってどういうことでしょう？よみがえったイエス様と出会うということは、「確信」というより、客観的には証明出来ないことも含んでいるのかもしれないと思いました。私たち、「私は私なりにイエス様と出会いました」というような「証言者」にはなることは出来ても、それを科学的・普遍的に「証明」する、ということは出来ないと思います。復活されたイエス様は、今は天にお帰りになって肉体を持って私たちの間に生きておられる訳ではありませんから、主の復活を明らかにするということは、私たちの手の内には無いことだと思います。

[2] 復活―人生の全肯定とゆるし

では、私たちが復活のイエス様と共にある、ということはどういうことなのでしょうか？私たちの死後、信じる者には永遠の生命が与えられるという教えを受け止める、それが「復活の主」を信じるということなのか。つまり「死んだ後、裁かれて地獄のような所に行くのが恐いから信じる」ということなのでしょうか？それも確かにきっかけになる場合があるかもしれないと思いますが、それだと、心の底にあるのは「恐れ・恐怖」になりますよね。そうすると、神様という方は、ただ上から君臨する存在になってしまい、そのような信仰には喜びはないと思います。今日の聖書の箇所ではないのですが、例えばヨハネによる福音書が記す復活の主と弟子たちの出会いの場面では、「弟子たちは、主を見て喜んだ」（ヨハネ20:20）と書いてあるんです。恐れから信じる信仰もあるかも知れないけれども、ここでは、復活の主との出会いは喜びを生みだしています。

今日のマタイによる福音書においては、まずマグダラのマリアともう一人のマリア（27:56「ヤコブとヨセフの母」）という女性たちに主イエスが出会って下さったことが書かれています。初めは天使の「イエスはもうこの墓にはいない。弟子たちに、復活されたことを告げなさい」と言う言葉に促されてガリラヤに走って行くのですが、その行く手で、イエス様が彼女たちを待っていたというのです。「おはよう」とイエス様はおっしゃいました。「おはよう」―何という日常の言葉でしょうか！私はここにとても心打たれます。彼女たちにとっては、心に深い無念の思いや後悔があったに違ないと思います。「あのような方はいなかったのに、私たちは何も出来ずに見殺しにしてしまった。せめてあの方のお墓で泣かせてほしい」と思っていたのではないでしょうか？それは、彼女たちの「ロス（喪失）」体験です。イエス様も終わったけれど、私たちの幸せの時も終わってしまった、あの時を境に日常は途切れてしまったと。けれども、そうではなかったのです！「おはよう」。…まるで何事もなかったかのようです。どこにも彼女たちを責める言葉はありません。これは、逃げ去ってしまった弟子たちに対しても同じです。彼らも思っていたと思うのです。「私の人生はもうダメなのか。自分はガリラヤでイエス様に声をかけて頂いたけれど、あの方は死んでしまわれた。俺たちが先生を見捨てたのだ。俺たちも終わった…」と思っていたのではないでしょうか。主を失う喪失（ロス）体験は、自分自身を失う体験でした。もう自分を待ちうけているのは、人生の衰えと「死」だけだと。彼らは霊的に死んでいたと言って良いと思うのです。しかし、ヨハネ福音書では、引き籠り、内側からカギもかけていたその部屋の只中に、復活の主は難なく入り込み、「あなたがたに平安があるように（シャローム）」（ヨハネ20:19）と言って入ってきて下さったのです。生活が失われていた彼らに、日常の明るい挨拶の言葉が語りかけられてきたのです。

　…私たちが誰かと生きている時、「死」というのはどういうものでしょうか？「日常のあいさつ」が失われる、ということではないでしょうか？私たちが誰かと交わす「おはよう」「おやすみなさい」或いは「行ってきます」「ただいま」。それがどれだけ私たちの日常を支えているか、それは失って初めて気付く様なものかもしれません。女性たちや弟子たちに、復活のイエス様はご自分から挨拶をして下さったのです！ここにあるのは、私は人生の‟全肯定”だと思います。大いなる「赦し」だと思います。繰り返しますが、彼らは皆、大切な人を見捨ててしまったという大きな痛みや悔いを抱えていたと思います。私たちもイエス様に対して、又身近な者に対して同じではないでしょうか。「ああ、遅かった」と悔やむことがあります。しかし、悔やんでいても人生は続きますね。そんな中に、復活のイエス様は私たちを訪問し、挨拶し、そして、「先にガリラヤに行きなさい」とおっしゃっているのです。ガリラヤというのは、弟子たちとイエス様の出会いの場、多く寝食も共にし、泣き笑った、彼らの懐かしくも幸いな場所です。そこから信仰がスタートした。信仰の歩みというのは紆余曲折ありますけれども、信仰者に「黒歴史」はありません！主はおられない時はない。‟数えてみよ主の恵み”です。そして「見よ、わたしは世の終わりまであなた方と共にいる」(28:20)と宣言して下さいます。復活の主は、私たちを見出すためによみがえって下さったと言って良いと思います。それは、私たちを孤独にしないためです。私たちに「恐れるな、あなたの罪は赦された」と告げるためです。今日、この朝もそうです。「おはよう」と、主は私たちにほほ笑みながら、わたしについて来いとおっしゃっていると私は思います。

[3] マーラーの「復活」の詩から

G・マーラーの『復活』という交響曲に、私は本当に深い慰めを受けるのですが、その最後の合唱の部分で、このようなことを歌っています。

***「おお、信じよ、おまえは虚しく生まれたのではない！  
虚しく生き、苦しんだのではない！***

***おお、あらゆるものを征服する死よ、今やおまえは征服された！***

***生まれ出たものは、必ず滅びる！滅びたものは、必ずよみがえる！   
よみがえる、そうだ、おまえはよみがえるだろう。」***

「あなたは虚しく生まれたのではない」と歌うのですね。あなたが大切にしてきた人との関係が、再び「おはよう」と交わし合える時を神様は用意して下さると思います。何故なら、十字架のイエス様の死によって、私たちの罪の赦しは完全に清算されているからです。私たち、いつかは分かりませんが、神様の完全なご支配のもと、新しい天と新しい地において、新しい霊の体を纏って生きることになるのだと思います。主が復活して下さったのは、その希望を与えるためです。新しく‟生きる”用意をしましょう！主の復活、それはイエス様のためと言うより、私たちの人生が、本当に豊かなものとなるためなのです。お祈りを捧げます。

イエス・キリストを復活させて下さった神様、そこにあなたの、私たちのための深いご計画があったことを教えられ、感謝致します。今日、復活のイエス様が私たちに「おはよう」と呼びかけて下さり、そして、私は世の終わりまで共にいるのだから、あなたの人生を生きろと励まして下さいます。聖霊がいつも私たちを捉えていて下さい。主イエスの御名によって祈ります。アーメン。